

ブログ作文技術(4)

第4章 ひきつけた読者は逃がさない！

ブログを読ませる基本は、なんといっても内容で読者を魅了することにあります。そこで、「話の組み立て方」「リアリティの出し方」「テキストを読みやすくする」「分かりやすくする」など、魅力的な文章にレベルアップするさまざまなアレンジ方法を把握しましょう。

Q 09 話をうまく組み立てたいのですが？

それには文章の型を利用すればよいのです。

文章の型とは書くための骨組みです。骨組みがしっかりしていると内容がずれることはありません。以下で型を会得すると、あなたのテキストは確実にグレードアップ！あなたなりにこの型を駆使してください。

(039) 型の基本、「起・承・転・結」

書く内容がずれないために必要な文章の型

書いているうちに、書く内容が微妙にズレて、わけのわからないテキストに仕上がってしまうことがよくあります。その原因のおおくは、文章が型にはまっていない場合に発生します。

つまり、文章の型さえしっかりしていると、内容がズレて支離滅裂になってしまうことはありません。型さえ身につけると、誰でも簡単に、話の展開がうまく組み立てられたテキストを書けます！

まずは、この“文章を書くための型”を身につけましょう。わかってしまうと簡単です。文章の型を身につける、これが一番手っ取り早く、うまいテキストを書けるようになるコツです！

起承転結のイメージ

「起承転結」という型が、文章を組み立てる上で最も基本的な型です。まずは、イメージをつかんでもらうために、特撮ヒーロー戦隊系(例はゴレンジャー)における起承転結の紹介。

- 起 町で異常事態(事件)が起こり、いつもどおり、悪の組織のしわざだとわかる。
- 承 ヒーロー5人がよって、たかって、事件の元凶である怪獣(モンスター)を倒す。
- 転 倒したと思った怪獣が復活、そして巨大化。
- 結 合体ロボを呼び、巨大化した怪獣を、なぜか人気のない山で倒し、町の平和が取り戻される…… 一件落着。

説明しますと、

- 起 「今から、こんなこと書くよ」という部分
- 承 「そして、こうなったよ」というエピソードの部分
- 転 流れが変わる見せ場、または承のエピソードをさらにツッコんだ部分
- 結 まとめ、エンディング部分

といった感じです。

では、それを意識して次の水戸黄門における起承転結を読んでみてください。

- 起 黄門様御一行がある村に訪れ、その村民(村民達)の悩みを聞く。
- 承 悩みの原因をたどっていくと、その村を治める悪代官にいきつく。そて、悪代官の屋敷で助さん、角さん、ご一行大暴れ。
- 転 黄門様の「助さん、角さん、もういいでしょう」という声をきっかけに、助・角「ひかえおろ〜」「この紋所が目に入らぬか〜」旅の翁が副将軍水戸光圀であることが判明。一同、恐れおののき土下座。
- 結 悪代官は、ねんぐの納めどき。苦しみから解放された村民(村民達)にお礼 & 見送られ、黄門様御一行は次の旅へ..... めでたし、めでたし。 The End !

なんとなくイメージがわきましたか？

まとめ

【起】で「出来事のきっかけ」や前フリをする。【承】で「突さい何が起こったのか」ということを具体的に語る。【転】で「驚くべき発見」や「起こった出来事で自分がどうなったのか」といったあなたなりの感想や考え、するどいツッコミを書く。【結】で「結局どうなったか」や、話のオチを書き、まとめます。

テキストを書く前に、「起は を書いて、承では を書こう。転で して、結で させよう」というように、少しメモをとっておくと書きやすいでしょう。また、書くことがズレません。

(040) 書く材料を列挙して4つにわけける方法

長いコラムを書くときは、簡単なメモだけでは書けません。そんなときにオススメの方法がこれ。具体的な方法について説明します。

1. 紙を2枚用意します
2. 1枚を十字に4等分する線を引き、それぞれの枠に起承転結と書きます

	起	承
	転	結

3. もう1枚に文章を書くための材料を列挙します(例はドラえもん)

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・のび太がいじめられる ・ドラえもん、道具を出す ・のび太が普通に使って仕返し ・のび太が道具について、悪知恵を働かす ・のび太、道具を変なふうを使う ・のび太、自業自得..... 痛い目にあう ・何かしら解決する |
|---|

4. 3.で列挙した材料を、起承転結のどれに該当するか吟味し、次ページのように2.の4枠に振り分けま

・のび太がいじめられる ・トラえもん、道具を出す	起	承	・のび太が普通に使って仕返し
・のび太が道具について、悪知恵を働かす ・のび太、道具を変なふうを使う ・のび太、自業自得..... 痛い目にあう	転	結	・何かしら解決する

5. 試行錯誤して、これ！と思うように材料を振り分けられたら起承転結にしたがって書きます。頭の中を整理するときにも役に立つ方法なので、ぜひ試してみてください。

(041) 型に縛られ書きづらくなったら...

起承転結に縛られて書けないとき.....

「【起】に～を書いて、【承】に～を書いて、ああ難しい！」起承転結の型をあまりに考えすぎて頭が硬直し、書けなくなってしまう場合があります。それは逆効果。テキストは楽しく書けないと、書き手が面白くありません。

そんなときは、「【転】命！！」と考えてください。

【転】を始めに考えよう！

【転】は言わずと知れた起承転結「核」の部分。【転】さえ決まれば後はなんとかなります。「ところが～だったんです」という部分である【転】。「ところが」というだけあって、ここさえ決めてしまえば、【起・承】の部分は、【転】と逆のことをいえばいい。まとめの【結】はこじつけちゃいましょう！

まとめ

起承転結は【転】があるかないかで決まってきます。つまり、少なくとも【転】とされる部分さえあれば、型が整っているように見える！ということ。

よって、「文章は転から考える！！」もありなのです。型にしばられ書けないのはもったいない。型は利用して、楽しくテキストを書きましょう！

Q 10 せっかくひき込んだ読者を逃がしたくない？

「テキストから読者を逃がさないようにするにはどうすればいいの？」

あなたのブログから読者を逃がさないように、簡単なヒントでテキストを変身できます。読者の心をつかんで離さない、そんな構成に楽しくアレンジしちゃいましょう！

(042) 長いテキストは、小見出しを入れて一休み

読む気がなくなるテキスト

長いテキストは読む気をなくさせます。あなたにもそういう経験はありませんか？「うわあ、長い…… ちょっと無理、このページとばしっちゃおう」というようなこと。

長いテキストは困りもの。私なんて、読んでいる途中にもよおしてしまい、トイレから帰ってきたら、「はて、どこまで読んだか？」と読んだ場所を忘れてしまうことが多々あります。本と違って、モニターはもっていきませんものね（本はもっていきますか？）。

根気のない私は、どこまで読んだか探しているうちに、「まあ、いいか！」と読む気をなくしてしまいます。

小見出しのススメ

前置きはさておき、どうしても長いテキストになってしまうことなんて、いくらでもあります。では、いったいどうすれば、読者は読んでくれるのでしょうか。それには、「小見出しを入れる」です。

小見出しによって、読者は長い本文の中で一息入れられます（トイレにも行けるし？）。最後まで読んでもらえる可能性は、グンとアップすること間違いなし。

小見出しを入れる場所の見つけ方

小見出しをつけるさいのポイントは2つ。

1 つは、小見出しによって、さも新しい話が始まるように見せること。または、そんな場所の前に入れてください。もう1 つは、その逆で、くられた話が、その度に終わるようにすることです。または、その後に入れましょう。

まとめ

長いテキストを、いくつかの小コラムにわけるように、また、そのコラム1つ1つに題名をつけるようにしてください。「このコラム長くて読むの大変そう」「短くて読みやすそう」への変換をぜひ！！

(043) 謎であるおいしいものから食べさせる

新聞の冒頭は……

新聞、雑誌をみると、書き出しに注意して読んでください。冒頭を読むだけで、なにが書かれているか、そのおおよそが分かります。

また、その冒頭は、とても興味をそそられるように書いてあり、思わず読んでしまいますね。例えば殺人事件の記事なら、次のような順番で書かれています。

1. どんなふうに殺されたか、生々しい殺人シーン
2. 事件の大まかな説明。犯人の動機等
3. 殺人にいたるまでのプロセス説明

なぜ、このように書かれているのでしょうか？ それは、「冒頭がつまらなければ、読者は最後まで読んでくれない」と知っているからです。だから、「おいしいものから食べさせよう」としているんです。

時系列にこだわらない

犯人が殺人にいたるまでのいきさつを語ってから、殺人現場の概要、事件の様子というように、時系列を追うように書いても、冒頭で読者をひきつけられませんが、それなら、時系列にとらわれず、読者が気になることを最初にもってきて、テキストにひきこみ、読んでもらった方が、読んでもらえないよりもずいぶんまし。

冒頭がおいしすぎると.....

ここで、注意点が一つあります。あまりにおいしすぎると、それだけしか食べてくれません。つまり、ネタやクライマックスをバラしすぎると、読者は、最初だけ読んで帰っちゃいます(それでも何も読んでくれないよりは、まし?)。

新聞なら、事実を客観的に述べているだけなので、単においしいものから書いても、興味をもった読者は最後まで読んでくれます。ニュース系の記事はさておき、そのほかのテキストの場合、それだけでは物足りません。

まとめ

テキストの冒頭は、なにか謎めいているぐらい、「なにかにおう」というぐらいの書き出しがちょうどよいと思います。おいしくも謎めいた文章で、冒頭を勝負しましょう。

(044) ただ「意地悪」と書くより、意地悪エピソードを

日常の会話でもエピソードを挿入すると、話はふくらみをみせてきますよね。たとえば、日常生活であふれているこんな会話、

- 「うちの彼、几帳面なのよ」
- 「あら、どうして？」
- 「それがさ、一昨日の話なんだけどね..... (エピソード)」

このエピソードは、いかに「うちの彼」が几帳面かを説明する話です。単に「几帳面だ」というより、もっと具体的な「うちの彼の性質」が、リアリティを増して相手に伝わります。

こういったエピソードの利点は、テキストにも応用できます。たとえば、ただ「意地悪な人」と書くのではなく、その人の意地悪なエピソードを書きましょう。読者に、なるほどその人は意地悪なんだと気づかせるように書くんです。

- ・「私の意地悪な上司が、今日もまた...」
- ・「いつも、私に仕事を押しつけ残業を強要する上司が、今日もまた...」

上よりも、下の例文の方が、具体的でわかりやすいでしょう？ 意地悪と書くよりも、より嫌な上司だとエピソードから感じとれます。ある種のリアリティも下の例文の方が増えていますよね。

単に性質を表す言葉を使わないで、エピソードを使ってその性質を読者へ気づかせるように工夫してみましょう！

注意点です。エピソードを選ぶとき、自分が読者に伝えたい性質がしっかり誤解なく伝わるお話を選びましょう。

(045) パロディで書く

日記などで一日の出来事を書いても、まったく面白くない場合があります。そんなときに使えるのがこの手です。

「パロディで書く」。パロディ化とは、あるエピソードを、みんなが知っているようなシチュエーション・フレーズに、当てはめ書くことです。

BEFORE & AFTER で説明してみましょう。

[BEFORE]

私「やばい、学校に遅刻する～！」
 母「朝ご飯はどうするの？」
 私「ご、ごめん！ 食べてる時間ないや。お兄ちゃん！ バイクで駅まで送って？」
 兄「またかよ！ いちいち駅いくのめんどくさい！」
 私「ただでとは言わないからさ。耳かしてよ！」
 (私の友達で、髪の毛長いスレンダー系の女の子紹介するからさ)
 兄「よし乗れ！ すぐ乗れ！ 絶対遅刻しないように送り届ける！ ってか学校まで送る！！」
 私「ひやっほ～う！ じゃあ、お言葉に甘えて！！」
 兄「い～やっほ～う！」
 母「じゃあ、朝ご飯食べる？」
 私「食べる～！！」

[AFTER]

私「ぬぬ、余は、また寺子屋に遅れてしまふのか！？」
 母「朝ご飯めされるや？」
 私「母上、食べている時間がござりませぬ！」
 私「おい！ おぬしの二輪型高速走行機…… 余を駅まで送ることに使わぬか？」
 兄「残念なれど、それがし、ただで動く足は持ち合わせておらぬ」
 私「ただとは申さぬ。何々、くるしゅうない。耳をかせ」
 (おぬしに、髪の毛長い細身のおなごをつかわせてやろう)
 兄「そういうことなら、お代官様！ 地の果て海の果て、寺子屋までお送りいたしますぞえ！」
 私「しゃっしやっしや～。さようか、さようか。おい越後屋…… おぬしも悪よの～」
 兄「はっはっは…… お代官様ほどでは」
 兄私「ふあっ、ふあっ、ふあ～」
 母「じゃあ、朝ご飯食めされませぬか？」
 私「食べる～！！」

パロディ化のいろいろ

上のBEFORE & AFTERは時代劇、悪代官のパロディです。全文をパロディ化するのもいいですが、一部分をパロディ化してもいいですね。

(例) ドンドンおおい、亜弥！ 起きてんのか！！ いるんだろ！？

「大変！ 父親のがさ入れだ…隠さなきゃ！ 隠さなきゃ！！」
 「てか俺逃げなきゃ！ 裏から逃げよ～って、4階じゃん！」

ドンドン！ おい、亜弥起きてんのか！！ いるんだろ！？
 エマーゼンシー！！ エマーゼンシー！！ 父襲来！ 父襲来！
 「危険物格納！！ 男性用衣類部隊は速やかに撤退せよ！」
 「てか俺逃げなきゃ！ 裏から撤収～！ って、4階…… パラシュートありません！」

部隊のパロディです。パロディには、職業、TV・CM での有名なフレーズなどが使えます。職業なら、スチュワー

デス、先生、ウェイトレス、神父などのお決まりの言葉を使いましょう。

(例) 「アナタは、浮気シナイコト..... チカイマスカ？」
 「もうしましえ～ん。だから、罰金ナシにしてください...」
 「神への償い、これ当然！！」

CMの有名なフレーズなら、たとえば...

(例) セラミックスの差し歯...35000円。矯正した歯...55万円。笑える喜び.....
 「ブライスレス！！」

注意点

パロディ化するときの注意点は、そのパロディを多くの人知っていることが前提です。でなければ生きてきません。それさえ気をつければ、パロディ化は楽しいアレンジ法なのです。ぜひ試してください！

(046) くいちがいでインパクト

文章で、急に話が展開していくところはどこでしたか？ そう【転】です。その【転】で使うと最も効果を発揮するのが、「くいちがい」。では、その「くいちがい」について説明していきましょう。

簡単にいいますと「くいちがい」とは、読者に先を予想させておいて、その逆を書く方法です。「こうなるのかな？」と思わせておき、「そうなるの！？」と驚かせる。例にいきましょう。

(例) 夫はとても優しいんです！家事も手伝ってくれるし～、仕事が休みの日なんかは、積極的にデートへ連れて行ってくれるの～ (のろけを予想させて...)

「だから、そんな夫と離婚しようと思って.....」 (裏切る)

(例) 最近、このド田舎に大手ショッピング施設が参入してきました。店舗に入って驚きましたね。「すごい品揃え！なんでもそろっちゃうじゃん」店舗を利用している客も口をそろえていってました。「なんて便利なんでしょう！！」 (ショッピングモールのようなものを予想させて...)

「さすがセブン.....」 (裏切る)

だいたい呼吸をつかんでいただきましたでしょうか。イメージは冒頭で、「くいちがい」は【転】で使うと効果的だといいましたが、そこにこだわらなくても大丈夫です。たとえば、題名(サイト名)からいきなり冒頭文で使う方法。

(例) 順風満帆愛の航海日誌
 「破局しました.....」

使う場所は、あなたの気分次第。場所を選ばず、臨機応変さが光る「くいちがい」。いろいろなところで使って、いろいろな効果を検証してみてください！

(047) 韻・シャレ・おやじギャグ

韻をふむのは、何も歌の歌詞や詩だけではありません。テキストでもふめます！

韻とは、類似した音を、間隔を空けて重ねることなんですけど、要はシャレですね。おやじギャグともいえます。しかし、おやじギャグだと侮るなかれ。文字でのシャレは口でいうときとは違って、何やら妙な高級感が漂ってきます(こともあります)。少なくとも、ただ「さむい」と一蹴されることは激減します。

そして、何より効果を発揮するのは、執筆しているあなた本人に対してです。テキストの中で韻をふんだり、シャレを挿入したりすると、「自分は上手い！」という気分になってきます。すると書くのが楽しくなり、筆がすすむ！これはとてもプラスです(ちょっぴり「自己満足なんだけど」と、どこかで思ってください)。また、読者に「うまい！」と言われる可能性もありますよ。テキスト内で韻をふむ方は、そういけませんから.....。

では、例文にイン！！

(例) うちの家計は風前の灯火。
私のオナラは、ふう以上のおたけび。

(例) 私の思いつて、重いですか？

なかなか韻とはいえないかもしれませんが、同じ述語の文を並べるのもいいかもしれません。たとえば、

(例) 彼女が色っぽく酒を飲む。
それ見て僕は、息を呑む。

(例) 奴は足が速い。小走りで行ったその先には…… 女。
どうやら奴は、手も早い。

述語をあわせて、並べるのはなかなか使いやすいものです。

韻は、音読みしてゴロがよければOKです。思いついたときに、勢いで書いてしまうのがポイント！「常にシャレにできないか？」というアンテナを張り、ドン！と挿入しちゃってください。歌の歌詞・ラップを参考にするのもいいと思いますよ。

(048) 高度なテクニク、その名も「天井」

ちなみに、天ぶらののったどんぶりのことではありません。「天井」とは「お笑い」の専門用語なのですが、「前出のギャグを二度、三度ということ」です。一度目のギャグをいってから、聞いている人がそれを忘れたころ、関係ないところでもう一度いったり、間違った意味でそのギャグを再度出してくるテクニクをいうんですね。

これはテキストでも使えます。要は、ツッコミでもボケでも同じフレーズを繰り返せばいいんです。

(例)

会社の同僚、山田を飲みに誘ったところ……「今日、かみさんが危険日なんで、ちょい失礼」と断られてしまった。どうやら奴……今夜が山だ。

行きつけの場所と違うところに行くと、なんとまあ、妙な人物と出くわしてしまった。

「あれ、高瀬君？高瀬君じゃないか！奇遇だねえ～」

お得意先の千野社長…… 神様、飲みのときぐらい休ませて。どうやら俺も……今夜が「山だ」。

「いや～千野さん！本日は一緒に飲ませてください！！仕事の話はヌキで！！（なわけない）」

一度出てきたフレーズを、なかば強引に再度組み込んでいく方法もあります。強引に入れていくとミスマッチが生まれますが、そのミスマッチがまた、実は面白いところ。

(例)

「おい、お前！千野さんとこへの売り込みやめたんだって？」

「はい、仲良くなっただんですけど、最後の売り込みがうまくいなくて……」

「それは残念だな……。くさっても俺も先輩だ。何かあったら何でも言ってくれよな。それはそうと、絵理ちゃんとはどうなったんだ？」

「はい、仲良くなっただんですけど、最後の売り込みがうまくいなくて……」

「そ、そうか……。なんかあったらなんでも……。 な！」

(例)

夫が絵を買ってきた。自分でやればいいのに、私に絵を飾らせる。いわれたとおりにした。玄関入ってすぐの壁に釘で固定。

「どう、あなた？これでい～い？」

「もっと上だろう！あ～あ～、釘で打っちゃってるよ……。 もういい！！」

……………

私の殺意も、不動のものへと釘が固定。

ふへふへ、ふへへへへへ

この「天井」は「韻」以上に、テキストを書く常日頃から、「同じいい回しにできないか？」というアンテナを張っていないとできません。みつけたら、ドン！ と挿入しちゃってください。

(049) 日々のアンテナを張り巡らす！

面白い日記・エッセイ・コラムというものは、いざ「書こう」と思ったときだけ書くことを考えても、なかなか書けません。やはり、書くためのネタがあるにこしたことはありません。

ネタ探し、これすなわち日々の観察です！

「いつでも、どんな場所でも、ネタは常に転がっている！！」と思って探してください。人を待っているとき、電車の中、仕事のブレイク中、授業でサボっているとき(笑)。子どものように、好奇心旺盛な視点、柔軟な視点で！

どんな些細な、くだらない、小さな情報も、あなたの助けになるときがきつとやって来ます。日々これ観察で情報をたくさん集めましょう！

情報多くて、損はなし！！

そして、テキストを書くときにも、情報収集とはまた違うアンテナを張り巡らしてください。あなたは今、たくさんのアレンジ法を頭にイメージできています。もちろんそのアレンジ法は「これを使うぞ！」と思いながら使えば、いつか、あなたの持ち技になるでしょう。しかし、技の中にはひらめきを要するものがあります。そのひらめきは、アンテナがあってこそ生まれるもの。「これ使えるんじゃないかな～」と頭の片隅に置いておいて、アンテナにひっかかれやすく使ってみてください。

Q 11 テキストにリアリティを出したいが？

「なぜリアリティが必要なの？」「どうすればリアリティが出せるの？」

ココでは、リアリティの必要性と、そのリアリティを文章にどう表現していくかについて説明します。臨場感あふれるテキスト、そんなテキストを書けるようになっちゃいましょうね！

(050) テキストにリアリティが必要なわけ

リアリティとは、「迫真性」「実在性」といった意味があります。この「迫真性」「実在性」がどうしても必要なのでしょうか。

「迫真性」がなければ...

まず、「迫真性」についてです。真にせまったテキストというのは、いったいどういうものなのでしょうか。ここでは、その状況、状態、シチュエーションが、読者の脳裏にパッと浮かぶようなテキストと定義しましょう。つまり、読めば読者の頭の中へと、状況が鮮明に描かれるようなテキスト、その現場が簡単に想像できるテキストのことです。

どうでしょうか。この「迫真性」は、日記のようなエッセイ・コラムにはとても必要な性質です。虚構・事実に関係なく、エピソードを語る場面ではとくに必要不可欠なのが迫真性でしょう。

迫真性は、フィクション・ノンフィクションに限らず、その両方に必要なものです。フィクションに迫真性がなければ、元も子もありません。さもそこで話が展開しているようなアレンジが大切です。ノンフィクションでも同じこと。それを体験した、実際に耳にした者にしか書けない、そんなテキストのアレンジが必要です。

「実在性」がなければ

では、続いて「実在性」についてです。「実在性」は、テキストの信憑性(しんぴょうせい)に関わってくる性質。実在してなさそうなら、そのテキストに信憑性はありません。読者に信用されることはないでしょう。つまり、この実在性がなければ、読者にそのテキストの内容を信頼してはもらえない！ということです。また、信頼が得られなければ、共感も得られません。「ほんとにそんなことあったのか?」「実際そんなこと考えられない」と思われたら、せっかくのテキストが台無しですよ。

まとめ

テキストにリアリティを出すことができると、より鮮明に、より共感を得られる形で、読者に内容を伝えられます。その方法は本当にちょっとしたことです。次の(051)からぜひリアリティの出し方をつかんでいってください！

(051) 要所になる状況、場面は具体的に描写する

リアリティを出すための基本

どのようにリアリティを出していくか。その一番の基本は、具体的に描写すること。

当たり前と思われるかもしれませんが、以外にぬけている基本だったりします。では、具体的に書くことで、どんないいことがあるのかについて、述べていきましょう。

イメージのしやすさ

利点は2つあります。

その1つ目は、具体的であればあるほど、読者がイメージしやすいこと。たとえば、自分が疲れている状況を説明するとします。そのときただ「疲れている」と書いても、読者には、何の疲労感も伝えられません。しかし、「さすがに酷使しすぎた……足の節という節が痛い。動かすたびにキシむ音がするようだ。」と書けば、だいぶイメージしやすいでしょう？ ひどい例ですが、要はそういうことです。「(044) ただ「意地悪」と書くより、意地悪エピソード」にも通じるところがあります。参照してください。

その場にいた者にしか書けない強み

利点の2つ目、具体的に書けば書くほど、オリジナリティが増します。より具体的に書けば、実際に「見た」「聞いた」「感じた」「体験した」あなたにしか書けない、そんなテキストに仕上がっていきます。そして、それは信頼・共感という形で読者に伝わっていくでしょう。体験したものにしか書けないテキスト……そこには、オリジナリティとリアリティが備わってきます。

具体化の注意点

ここで1つ注意があります。何でもかんでも具体的に書いてしまうのも、それはそれで考えものです。すべてを詳細まで書いてしまうと、一番語りたい大切な部分が、埋もれてしまうことになってしまいます。それはテキストのメリハリを考える上でも、マイナス要因。

まとめ

ここぞという、要所になる状況・場面を具体的に描写するようにしましょう。リアリティが増し、オリジナリティが出て、メリハリもつく！ぜひ、心がけてみてくださいね。

(052) 細かいところを描写

読者に「この人にしか書けない」と思わせるには……

前節(051)で、その場にいた者にしか書けない状況を描写したテキストに、リアリティが生まれるという話をしました。本節(052)はその実践編です。

読者に「そこにいた人しか書けないな～」と思わせるには、いったいどうしたらいいのでしょうか。それは、「人が目につけないような細かいところを描写する」と成功します。(004)、(005)に少し通じるところがあります。それでは、例文です。

細部を描写する例文

(例) 私が一人で飲んでいると、男が近づきいいよってきました。

男「さっきから見てただけど、どうしたの？ 独りでしょ？」

私「人待ちですので……」

私が一人で飲んでいると、太いたらこ唇にホクロのある男が近づいてきて、こともあろうにいいよってきました。ホクロたらこ唇「さっきから見てただけど、どうしたの？ 独りでしょ？」

上の例より、下の例の方が、書き手の「男を毛嫌いしている様子」が、まざまざと伝わってきます。また、唇の動く様がありありと脳裏に浮かんでくるよう。(でもないか?)

(例) ちょっとそれ系の恐顔の友達がいるんですけど……

眉毛が非常に薄く、目の横に三針の縫い傷がある、恐顔の友達がいるんですけど……

(例) 学校の中にある橋で、待ち合わせをした。

学校に朱色で、弁慶が刀狩りをしている舞台 1/3 スケール(当社比)のような橋がある。そこで待ち合わせをした。

まとめ

ポイントは、「細部」ということです。人なら、ホクロであったり傷であったり、その人の特徴である細部を描写しましょう。場所も同じで、その場所の特徴が活きてくるような細かい部分を、あなたなりの言葉で描写してください。それだけで、とてもリアリティが増します。お試しあれ。

(053) 動きある言葉を入れる

動きある言葉で描く

書かれた情景が具体的なら、読者はその場面、シチュエーションを思い描くことができます。しかし、そのさらに上をいく書き方があります。

それは、場面・様子を「動きのある言葉で描写する方法」です。

動きある言葉の効能

具体的に書きますと、読者は情景を頭に浮かべることができます。が、それ以上の効果は期待できません。しかし、そこに動きある言葉が加わると、テキストの中に読者を一気に引き込めるでしょう。

読者はその動きある言葉によって、まさにその場にいるような感覚にとらわれます。そして、「これからどうなるのか？」という期待に想像を膨らませるようになります。では、実際にどういう言葉を使っていけばいいのか、例文でニュアンスをつかんでください。

動きある言葉例文

(例) 雑草の生えた、学校の橋で待っていた。

雑草がそよそよ揺れている、学校の橋で待っていた。

(例) 花屋の店長は、植木鉢に植えられた花を、すすめてくれた...

花屋の店長は植木鉢の土を替えながら、そこに植えられた花を差し出した。
「これにしな.....」

それぞれの例を、上と下で読み比べてみてください。物・人が動いている様子を、ちょっとだけ加えて描写する。それだけで、だいぶ見え方がちがってきます。読んでいる人にも、待っている場所の風や、花をすすめる店長の様子が、鮮明に感じられるのです。

感覚の表現にも動きある情景を

(例) 疲れていたの、帰ってすぐ眠りについた。

この文では、この人物の疲れがとても曖昧に書かれています。それを次のように変えると.....

(例) 疲れていたのか、家に着くやいなや電気もつけず部屋に入り、そのまま床に倒れ込み、眠りに落ちていた。

曖昧だった疲れが、「布団にたどり着けないほどの疲れ」として具体的に、動きのある情景として伝わってきますよね。

動きある言葉で効果を発揮するのは、場面・情景だけではありません。あなたの感覚・感情をも動いている情景に当てはめると、その思い・感じを読者の思考へと直に訴えかけることができるんです。ぜひ、動きある言葉をあなたのテキストに！

(054) 読者に気づかせる

真実味がない

たとえば、いきなりここで「私は誠実で人から愛されています」と書いて、いったいどれくらいの方が私を信じてくれるでしょうか。信じてくれた方、ありがとうございます。しかし、あなたは奇抜な方です。本来信じてくれる人は皆無。おそらくいません。では、「私の友達は、誠実で愛される人間だ」と書いたらどうでしょうか。先ほどよりは信じてもらえるかもしれませんね。でも、まだ真実味には欠けます。では、いったいどうすればいいのでしょうか？ (044)を参考にしてください。

多くを語るより.....

それは「読者自身に気づかせる！」です。

書き手がどんなに頑張っても、ある人物の伝えたい性質すべてを書き綴ったとしても、読者は、押しつけられたよう

な気分になってしまうだけ。その上、信じてもらえません。それなら、多くを語らず、読んでくれる人自身にその性質を気づいてもらうことにしましょう。

様子・出来事を書いて、気づいてもらう

具体的な方法です。その性質をよく表している様子・出来事を書いて、読者に気づいてもらいます。さきほどの例、「私の友達は、誠実で愛される人間だ」で説明しますと、「横断歩道を、老人の荷物を持ち歩いてきたシチュエーション」を描いて「誠実さ」を、「彼が落ち込んでいるときの周りの反応」をエピソードで書いて、「愛されている人間」を読者に気づかせます。

まとめ

読者をその現場に出くわした第三者に見立て、傍観者(読者)に観察させるように描写する。そして、ある人の性格・容姿・感情を読者に想像させ、気づいてもらう。これは、リアリティを出すのに非常に効果的な手法です。ぜひ試してみてください。

(055) 現在形を使って作る臨場感

すでに終わったこととして事実を淡々と書き連ねていく人がいます。別に悪くはないのですが、そういったテキストは、どうしても現在との時間の距離を、読者に感じさせてしまいます。そういった文章と読者との距離は、読者がテキストに入っていけない小さな原因になりえます。その原因を取り除く方法はなんでしょうか？ そう、現在形で書くことです。そこで動いているような臨場感を表現するのに現在形は適していますし、扱いやすい方法ですね。

(例)

(過去形) あの時、部屋全体が揺れた。「痛！」私は叫んだ。上を見上げて驚いた。本棚から、次々と並べていた本が床に落ちてきたのだった。

(現在形) その時、部屋全体が揺れる。「痛！」私は叫ぶ。上を見上げると、本棚から、次々と並べていた本が床に落ちてくるではないか……

(例)

(過去形) どうやらその男は、私の下着を物色しているようでした。恐くなった私は、急いで警察に通報しました。そして……

(現在形) 男は私の下着を物色しているように見えます。こわくなり、私は急いで警察に電話を…… そして…
…

現在形(それぞれ下の例文)の方が臨場感がありますよね。現在形は、そこで時が流れているよう表現するのに適した方法です。

(056) 会話をおりませる

こちらの方が現在形よりも使いやすかもしれません。会話をおりませると、それだけで「今まさにそこで場面が展開している」という感じをかもし出せます。やりとりをうまく表現し、会話体を工夫する。読者は、まるで目の前で言葉のキャッチボールが行われ、それが聞こえてくるような感覚におそわれます。

(例)

昨日、彼にブレーキを早くしてほしいと文句を言ったら、頭をこづかれてしまった。ムカつく。

昨日の会話

私「もうちょっとブレーキ早くしてほしいんだけど……」
 彼「あっ？ 横に乗ってるだけなのに文句言うな！」
 ポカ！！
 私「痛った～～！！何で殴るの！？」

シナリオを書くように会話の場面を載せてみてください。

注意点が1つ。テキストの中に会話を多く取り入れすぎると、間延びした感じになってしまう場合があります。気をつけてください。

(057) 謙虚さを入れると、共感を得る

読者が共感できるテキストとは、「その読者にとってリアリティがある」テキストなのです。前に、人が書かないようなオリジナリティあふれるテキストが面白いといいました。しかし、共感を得られない、常識からかけ離れたものを書いてしまっては、読者は不快な思いをするだけ。面白くもなんともないでしょう。共感してもらおう、これはとても大事なのです。

では、どのようにすれば共感を得られるのでしょうか。その方法の基本は、「謙虚さを入れる」です。

謙虚さを入れるというのは、客観的な視点を入れるということ。冷静な目で、自分とテキストを俯瞰するような、「書き手自身を省みるような一文を入れる」ということです。

たとえば、映画についてのコメントを書いていたとしましょう。そしてそこに、「私の主観が多少入っています。」というようなコメントを入れておきます。毒舌な酷評を下すなら、なおのこと入れてください。

謙虚さが入ると読者は押しつけられた感じもなく、「あなたの意見」としてテキストを読めます。すると、テキストの本来もつ説得力が、自然と力を発揮できます。「客観的な意見です」と押しつけても、読者は引いてしまうだけ。せっかく書いたものなんですから、読んでもらい、共感を得たいですね。謙虚さをテキストにいれて！

注意として、「私はもともと私の意見として書いている」といっても、読者に伝わらなければ、意味がありません。書かなければ伝わらないときもあります。また、逆に、サイト全体に謙虚さを伝える工夫がなされているなら(たとえばサイト名が「一個人が吠える毒舌批評」)、テキスト本文に入れなくてもいいかもしれませんね。主観・客観については(019)も参考にしてください。

(058) ちょっとした下心を入れる

(010)で道徳的な内容に終始すると、オリジナリティがなくなるといいました。それに似ています。キレイ事を並べると、テキストからリアリティが奪われます。本当のことであったとしても、キレイ事ばかりでは、読者はなかなか共感してくれません。その理由は、建前だと感じてしまい、真実味が感じられないからです。下のBEFORE & AFTERをみてください。

[BEFORE]

幼なじみの亜弥が、彼氏にふられて落ち込んでいた。何か俺に力になれるようなことはないだろうか。できることがあったら何でもしたい。

…… どうか、早く元気になって。そう祈りながら今日は眠りにつきます。

[AFTER]

幼なじみの亜弥が、彼氏にふられて落ち込んでいた。何か俺に力になれるようなことはないだろうか…… 「支えになれば、振り向いてもらえる？」とってしまう自分…。

こんなことから、亜弥はこっちを向いてくれないんだろうな。そんな反省をしながら、今日は眠りにつきます。何はともあれ、早く元気になってもらいたい。

【BEFORE】では、キレイ事だけで終わってしまっています。これでは、少々白々しさを感じざるをえません。逆に【AFTER】では、「早く元気になってもらいたい」というところに、なにかしらの真実味が感じられます。なぜでしょうか。

それは「彼女を振り向かせたい」という「下心」が入っているからです。建前のようなキレイ事に比べ「下心・よこしまな心・悪の心」というものは、「わかる……」と共感されやすい性質があります。「下心」を入れると、「元気になってもらいたい」という部分まで、イモヅル式に共感してもらえます。また、【BEFORE】より【AFTER】の方が、書いた人への愛着が湧きます。

注意点です。読者が引いてしまうような、あまりに酷い下心は入れるのは NG。共感以前の問題ですね。入れる下心は、「自分にかまってほしい」「見栄をはりたい」「モテたい」「ケチな心」といった、かわいらしい程度にとどめてください。

リアリティを出すのに、下心も使いようです。

(059) 無駄な部分を入れてみる

何事にも、コーヒー・ブレイクは必要ですね。テレビのドラマ・時代劇にも、息を抜くシーンが挿入されています。たとえば水戸黄門なら、由美かおるの入浴シーン。話の流れには全く必要ありませんが、見る者の目を休ませる他、乱闘シーンとのギャップがクライマックスを際立たせる効果にもなっています。

テキストでも、長くなればなるほど無駄な部分、「遊び」が必要になってきます。最初から最後まで無駄のない文章では、疲れてしまいますからね。

では「遊び」について、具体的に説明していきましょう。ここでは、本筋と直接関係のない部分を「遊び」と呼んでいます。例を挙げてみましょう。

- ・ 話に出てくる人物のキャラクターを表すエピソード
- ・ 起こった出来事に関係のない情景描写
- ・ こっそりとはった、主題への伏線
- ・ 内容理解を深めるための例文

テキストの内容に直接は関係ないが、本筋を際立たせるため間接的に関係してくる部分、それが「遊び」です。一見無駄に見えて、何らかの隠し味になっている「遊び」。その性質上、とても入れるのが難しいのですが、主題を際立たせ、メリハリ・リアリティを出すのにとっても効果的です。

もっとも、一番伝えたい部分・要所の中に、無駄な遊びを入れる必要はありませんが、要所前に1つや2つ遊びを入れることをおすすめします。テキストが長くなるようなら、なおのこと入れてみましょう。

(060) バッサリと省略する

「無駄な部分を入れてみる」と書いておいて、「省略する」と逆を書くのは少々気が引けますね。

最初から最後まで、起こったことを全部書いてしまうと、テキストはどうなってしまうでしょうか。書き手の一番伝えたいところが読者に伝わらない、焦点のボケたテキストになってしまいます。一番伝えたい部分、事件の焦点、話のクライマックスに関係のないテキストは、バッサリ省いてしまいましょう。たとえば、【起承転結】の【承】なら【承】をバッサリ省いてしまうんです。エピソードならエピソードを1つ、まるまる削ってしまいましょう。せっかく削るなら、そのくらいやった方が効果的。

実際、(059)のように「考えがある」無駄な部分というのは、クライマックス・要所を引き立てたり、本題への伏線であったり、何かしら機能をもつていいのです。しかし、何の考えもなく入れた部分はもちろんのこと、機能をもつていたとしても「入れたところで要所が際立たない」のなら、迷わず省略するのが吉。やはり、焦点を際立たせ、話をピンボケさせないのが大事です。くっきりとクリアに伝わる焦点の方が、読者にリアルに伝わるわけですから。

勇気を出して、ぜひ文章を削ってみましょう！！

(注) (021) 書くことは1つに絞る を参照してください。

(061) 少し大きさに

伝えるための「誇張」

「百聞は一見にしかず」という慣用句があります。「何度も聞くより、一度実際に自分の目で見の方がまさる」という意味ですが、文章も同じですね。どんなに見たまま聞いたまま表現したとしても、言語というツールを通したとたん、なかなかその感動は読者に伝わりません。では、どうすればいいのでしょうか。

「実際よりも、大きさに書く!」。100倍大きくして……とまではいいません。ちょこっと大きさに書く程度でいいんです。普通に書いて読者を楽しませるのは、相当な難しさをとまなうことでしょう。少々のアレンジして、誇張して読者を楽しませる工夫をする。そういったテキストの方が、事はリアリティを増して伝わります。また、工夫されたテキストにこそ、読者は惹かれるもの。そして書き手にとっても、アレンジして読者を楽しませようと書く方が、ただ綴るよりも面白い作業のはずです。

テキストを編集する上で必要な「誇張」

決して「嘘を書け」とすすめているわけではありません。「アリもしないことを、アルと書け」ということではなく、「読者に伝わるように書くには、少しばかりの誇張も必要である」ということです。そのときの状況・心境を、読者にしっかり伝えるには、誇張という手段も、テキストを編集するさい大切なのです。

伝わってこそ真実

テキストを書く作業は、事実をありのまま述べることではありません。起こった通りにすべてを淡々と書いても読まれるテキストにはなりません。必要なところは取り上げ、いらぬところは排除。あるシーンは誇張を加え詳しく書き、あるシーンは簡略化してメリハリをつけます。そして、その各シーンをつなぎ合わせていくのが、テキストを作る作業です。

「ある意味、真実をねじ曲げている」といえますが、そうではありません。この作業は、読者にコトの本質を伝えるため、新たな事実を構築していくものなのです。ありのまま伝わってこそ真実。伝わらなければ、真実も何もありません。伝えるためには、少しばかりの誇張が必要です。

まとめ

何ごとも「相手へのサービス」という気持ちが大切ですね。相手、つまり読者に伝わるように、わかりやすいように、そして楽しんでもらえるように工夫する。そういった読者への気持ちは、あなたが気づかぬうちに、それとなくテキストに染みこんでいます。「まずは気持ちから」……ですね。

話にメリハリをつけ編集し、少しの誇張をトッピングして、面白く伝わるものを楽しく作る。それがテキスト作りの醍醐味です。うまく誇張して、読者を楽しませるテキストを作ってくださいね。

Q12 読んでいて単調な流れのテキストになってしまうのですが？

～文章にメリハリをつけよう～

「メリハリはどうして必要なの？」「どうやってメリハリをつければいいのか？」ここでは読者を楽しませる編集のカナメ、メリハリ作りについて触れていきましょう。意識的にメリハリを表現できるようになると、テキスト創作がどんどん楽しくなります。

(062) メリハリについて

このファイルの端々で、「メリハリ」という言葉を書いてきました。ここでは、「メリハリが必要なわけ」「メリハリをつけるということはどういうことか」について掘り下げていきたいと思えます。

単調なコラムは.....

テキストにメリハリがないと、どうなってしまうのでしょうか。メリハリのないテキストとは、単調なテキストのことですね。テキストが単調だと、読者にとってまったくの面白くないテキストになりかねません。

テキストには、山・谷があってこそ面白い。谷ばかりで盛り上がり表現できていないもの、逆に初めからずっと盛り上がった調子で書かれて本当の山場が分からないものなどは考えもの。ずっと同じペースで終わってしまっはいいけません。どんなペースであっても単調だと、読者を飽きさせてしまうのです。

メリハリをつける = ギャップを表現

では、テキストにメリハリをつけるというのは、いったいどういうことなのでしょう。メリハリをつけるとは、内容が盛り上がる部分・要所を「山」として、それ以外の部分を「谷」として表現することだと考えています。つまり、「要所とそれ以外のギャップを表現する」ことなのです。

次の(063)から、そのギャップのつけかたについて具体的にふれていきたいと思えます。メリハリをつけて、楽しくテキストをアレンジしていけるようになりますよ！

(063) 要所とそうでない部分でのメリハリ作り

普通の部分はおおざっぱに書いて、要所をできるだけ詳しく書く。それに徹するだけで、テキストにかなりのメリハリが生まれます。

強調すべき要所で詳しく書くために、同じようなことを何度も言葉を換えて繰り返すのもいい方法。そうすることで、読者の読むテンポを調節し、長く留まらせることができるからです。

また、要所以外の部分をおおざっぱに素っ気なく書くと、大切なところがさらに際立ちますね。

(例)

久しぶりに余裕をもつて起きた。パンを食べ、顔を洗い、歯を磨く。着替えようと思ったときに気づいた。えーっと.....

ズボンがない.....。

スーツのスラックスが無い。

どこを探しても1本として見あたらない。タンスにはない、スーツケースにもない、もちろんベランダにも干してはいない。上はバッチリ決まっているのに、下半身がブリーフ1丁と紺のハイソックスという変態さ抜群の格好で探し回る。

嫁は、嫁はどこだ！！ いた！

俺「パンツが見つからない！」
 嫁「そりや、全部出したもの」
 俺「おいおいおい、今日何はいていったらいいんだよ」
 嫁「あの、あなたの会社、祝日休みでしょ？」
 俺「あ……」
 今日は、会社休みでした。

上の例では、ズボンがなく探すところがミソ。なので、それまでの朝の儀式は、極力単純に飛ばして書いています。くだいですが、ズボンがないことを、3回繰り返してみました。「ない」だけに焦点を当てると相当繰り返していますね。探しまわる部分を詳しく書いて、オチを際立たせる。書き手の焦りが伝わる一品です。

要所を詳しく書いて、それ以外は飛ばして書く。メリハリ作りの基本だと思って、ぜひ、取り組んでみてください。ちなみに、会話を入れることもメリハリ作りに有効。それは(067)にて。

(064) 文の長さで時の流れを表現

時の流れを文体で表現？

テキストの文体だけで時間の流れを表現できると思いますか？ 答えは「できる！」です。

文の長短で時の流れを表現できます。文の長い短い、読者の感じる時が流れる速さを速くしたり遅くしたりできるんです。たとえば、嫌なことをしているときは時間は遅く感じますし、楽しいときや焦っているときは、時の流れを速く感じます。その感じを文の長短で表現できるんです。

短い文が表現できるもの

たとえば、短い文は速いテンポ。忙しく時が流れている様子や、登場人物が「急いでいる姿」・「心の焦り」が表現できます。

(例)

やばい、遅刻する。二日連続は無理！
 トーストを焼く。着替えて、洗顔。
 「チン」
 焼けた。そして僕は、パンを口にくわえ、車に乗り込んだ。あっ鍵忘れた！

慌ただしい時間の流れが、短い文によって表現されています。

長い文が表現できるもの

続いて、長い文は遅いテンポ。ゆっくり時が流れている様子が表現できます。

(例)

おやおや、またうちのバカ息子は…… えらい急いでまっ、ええ元気で車乗っていきなはったわ。もう5分早う起きたらええ話やるうに。はて、それにしても千鶴子はどこに行ったやるか。天気もええし、ぼかぼか暖かいから、どこぞの公園にでも、ひなたぼっこにいったかいのお。わしはここで、ゆっくり過ごそ。

のんびりした時間の流れが、長い文によって表れていますね。
 文の長さを変えて、読者が感じる「時のテンポ」を調節し、メリハリをつけましょう。

補足

文の長短を調節するのは、次の場合のメリハリづけにも有効です。読者に「ゆっくり読んでもらいたいとき」と、「読

み飛ばしてほしいとき。『複雑さを表現するとき』と、『単純さを表現するとき』。ぜひ、お試しください。

ちなみに、一文の長さの基本は『短く』です。読者にとってシンプルなものが読みやすいので。詳しくは(072)で。

長い文	短い文
ゆるやかなテンポ	はやいテンポ
おだやかさ 落ち着き 読者をとどませる効果 複雑さ	急ぎ 焦り 読者を次へ次へと押しやる効果 単純さ

(065) 読みどころを予告する

クライマックス・読みどころへのメリハリを演出する方法がこれです。『読みどころの予告』。

『読みどころの予告』とは、読んで字のごとく『ここから読みどころですよ!』と読者に予告することです。つまり、『いよいよコラムの要所かな』と読者に思わせる語句・文を、クライマックスの手前に入れることです。たとえば、下のような語句がそれにあたります。

- ・ そしてあるとき、次のことに気がついたのだ。……
- ・ 恐るべき事が起こった。それは……
- ・ なんと……
- ・ にわかに信じられない光景が広がっていた。そこには……

予告によって得られる利点は、テキストのメリハリだけではありません。こういった、予告文・予告語句を入れると、読者は自然と次に続く文章への構えを変えます。つまり予告文は、読者の注意をひいたり、読みどころに対する読者の集中力・期待度を高めるのにとっても効果的なのです。

(066) 見た目から変える文章の雰囲気

使う言葉によって、見た目の印象・雰囲気を変えられます。日本語の言葉には3種類ありますね。ひらがな・カタカナ・漢字です。言葉のもつイメージを利用し、テキストのもつ雰囲気を操ります。

ある文・ある段落を境に突然『漢字』、または『ひらがな』を増やしてみる。それによって読者は、視覚からテキストにおける雰囲気の変化を感じとります。たとえば、下の文を見てください。

(例)

TV『今回の本部署のセクシャルハラスメント増加につきましては、部長である私の監督不行届が原因です。今後の対応といたしまして、私自身がセクハラ撲滅運動に参加し、全身全霊、体で挑んでいく所存であります。誠に申し訳ありませんでした。』

娘『おとうちゃん、どういみ〜?』

父『これは、えらい人が、『会社にエッチなことをする人が増えたのは私が見てなかったせいです。これからは、エッチな人を、がんばって無くしていきます。ごめんなさい。』って言ってるんだよ』

娘『じゃあ、おとうちゃん、えっちだからたいへんね』

父『ははは、ははははは……』 (嫁は何を吹き込んだ?)

テレビが流れている場面と父娘の会話シーンとで、明らかな雰囲気の変化が感じ取れます。漢字の多い文章から、ひらがな主体の文章に切り替えて、公的で堅苦く冷たい場面から私的で柔らかい暖かみのあるシーンへの変化を表現しています。

このように、意識的に言葉を使い分けると、視覚効果をつかってコラムの雰囲気を変化できます。この方法もメリハリ作りには最適ですから、ぜひ試してみてください。

ひらがな	明るい、やわらかい、幼い、やさしい、あたたかい、おだやか
漢字	暗い、堅い、厳しい、冷たい、重苦しい
カタカナ	非人間、恐怖、音、外国、小バカにした

(067) 会話で変化をつける

会話については、(056)でもふれました。リアリティの演出のために、会話をおりませるといいました。ここではテキストにメリハリを作るためにも有効だということを説明しましょう。

使う言葉を変えて見た目の雰囲気を変えたように、会話を取り入れても視覚的メリハリが作れます。普通の文と会話文とでは、読者の受けるイメージ、したがって気分もちがってきますよね。

日記やエッセイで普通の文ばかり長く続くと、読者は疲れてしまいます。その合間に会話文が入ると、読者は楽しく読めて、息抜き効果も期待できます。しかし、逆に会話部分が長くなりすぎると、テキスト全体がゆるんだ雰囲気になってしまい、しまりがなくなってきました。その点を注意し、メリハリをつけるために会話文を入れていきましょう。

[BEFORE]

太郎という昔話を、皆さんはいくつご存知だろうか。私の思い浮かぶところ、太郎は3つ。「桃太郎」「浦島太郎」「金太郎」だ。

さて、この3大太郎について、面白いことを気づかせてくれる番組があった。それは、「金太郎」のストーリーを話せる日本人は、ほとんどいないのでは？ というもの。

自分は……金太郎の登場シーンも話せないし、どうしてもラストが「森のクマさん」で終わってしまう始末。たしかに途中までしか話せない。試しに大学時代、言語教育を専攻していた嫁に聞いてみた。答えはNO。途中まで話せても、結局は最後まで話せないのだ。

番組の追求結果はというと…

[AFTER]

太郎という昔話を、皆さんはいくつご存知だろうか。私の思い浮かぶところ、太郎は3つ。「桃太郎」「浦島太郎」「金太郎」だ。

さて、この3大太郎について、面白い発見をした番組があった。それは、「金太郎」のストーリーを話せる日本人は、ほとんどいないのでは？ というもの。(そんなに話せないもんか?)

「…昔々金太郎がいました。どこだったっけ？ 山にいました、マサカリでクマと相撲をとって勝ちました……そして、楽しく暮らしました。」

自分で語ってみたところ……金太郎の登場シーンも話せないし、どうしてもラストが「森のクマさん」に終わってしまう始末。試しに、大学時代、言語教育を専攻していた嫁に語らせてみた。

「昔、マサカリをもつた金太郎がいました。動物と森で相撲をとって遊んでいたところ、ある日一番強いクマに勝ちました…終わり？」

途中まで話せても、結局はマサカリに始まり、森のクマさんに終わる……

最後まで話せないのだ。

番組の追求結果はというと……

会話の入れ方にもいろいろあって、(063)の例文のように対話形式でゴッソリ入れる方法もあれば、上の[AFTER]のようにヒョイっと入れる方法もあります。また、括弧でくくらずに、普通の文と区別せず入れるのもいいですよ。[AFTER]では「」でくくりましたが、会話調を普通の文に織り交ぜていく方法です。会話調に急に変わる手法は、次の(068)で取り扱いますから、参考にしてください。

(068) 語り口調を急に試してみる

「使う言葉の種類を変える」「会話を入れる」この2つは、それぞれ見た目からも雰囲気を変えてくれました。ここで紹介する手法は、見た目を変える力はありませんが、メリハリをつけるには効果的。それは、「語り口調を急に変

える」方法です。

まず、語り口調のペースを決める

簡単にいってしまいますと、「ベースの口調と違う語り口調を、急に混ぜる」ということです。まず、あなたの語り口調のペースを作り、テキスト全体はそれに統一します。丁寧な「です・ます調」であったり、押しの強い「だ・である調」であったり、その中でも「読者に語りかけるような調子」であったり、「女性を思わせるような」、または「男性を思わせるような語り草」であったり……。ペースは何でもいいですから、コラムごとに統一するのが大事です。

語り口調激変の例

ベースが決まったら、いよいよメリハリのアレンジです。注目してもらいたい箇所の語り口調を、激変させてやります。以下は、学術的な文体が、急に会話調になる例です。

(例)

こんなデータを見た。現在の日本で、1組の夫婦から生まれる子どもの数は、平均約1.4人。この数字がいったい何を表しているかお気づきだろうか。

2人から2人生まれれば、現在の人口は維持される。つまり2人以下なら、人口は減る一方。このままいくと、なんと、西暦3000年に日本の人口は30人をきるらしい。

だから嫁！今夜は寝かさなよ～ん
全国のお父さん、お母さん、日本のために！今夜が山です。

まとめ

清楚な女性のような語りか、そこだけヤンキー姐さんみたいな口調が変わったり、強気な口調が急に弱気になったり……。といろいろなパターンが考えられそうです。ペースが作れば、それを180°変えた口調に変化させるだけ。応用範囲が広いので、あなたのオリジナルをぜひ作ってみてください。

補足

注意です。ただの「です・ます調」から「だ・である調」に変えるのは、変化が少なく気づかれにくいでしょう。そして、気づかれたとしても、「ただ間違っただけかな？」と思われることしばしば。「です・ます」「だ・である」の変更はとても難しいので、気をつけてください！

(069) 飾るか飾らないかで作るメリハリ

細かい部分でのメリハリ作り

基本は要所を詳しく、それ以外をシンプルにです。その基本の延長上にあるのが、この実践。要所とそれ以外といった、大きい区分でのメリハリ作りというより、もう少し小さいところで力を発揮してくれます。修飾・比喻するかしないか、飾るか飾らないかで、細かい部分のメリハリを作ります。

[BEFORE]

一昨日、合コンにってきました。3対3の合コン。相手の男性陣は友だち同士の「高校時代の友人たち」です。

高校時代からの友達ともなってくると、就いている職業はホント多種多様でした。一人は現場の人。続いては公務員。最後は医者。お前ら3人とも友達か？ というぐらい違う業種です。

私のお目当ては、現場のあんちゃんです。いやいや、いくら私が 29 だからって、職業だけで男を選びません。ほんとですって。

今日になって連絡くれたのが、あんちゃんだけ……

もうすぐ三十路の彼氏なし！ 選んでる場合じゃないんです！

文章に飾りをつけて、メリハリを生む！ ここで、3人紹介のときに飾りをつけて、差別化しましょう。本当は誰を狙っていたのが、読者に気づかせるように、職の違いがより際だたせるのがポイントです。

[AFTER]

一昨日、合コンにってきました。3対3の合コン。相手の男性陣は友だち同士の「高校時代の友人たち」です。

高校時代の友達ともなってくると、ついている職業はホント多種多様でした。1人は、現場の人。続いては、公務員。最後は、「光ってる、銭が後ろで光ってる、約束されたる、御台所の地位」な、お医者さま(字余り)。お前ら3人ともほんまに友達か？ というくらい違う業種です。

私のお目当てはもちろん現場のあんちゃん。いやいや、いくら私が 29 だからって、職業だけで男を選びません。ほんとですって。なんせ……

今日になって連絡くれたのが、あんちゃんだけ……

もうすぐ三十路の彼氏なし！ 選んでる場合じゃないんです！

まとめ

修飾語・比喻といったものは、いわばアクセサリーのようなもの。あまりに身にまといすぎると、1つ1つの飾りが目立ちません。一番、自分が勝負したいところにつけないと。かといって何も飾らない文章も考えもの。客観的で観察がうかがえ、いいはいいなのですが、味気ありません。適度な飾りをオススメします。

補足

何も飾らない文章は、観察がうかがえるといいました。この効果が活きてくる系統があります。それは、ニュースや論文系のテキスト。こういったコラムを書くとき、飾りを省くのは、いい手法だと思います。参考までに。

(つづく)